

# 南イタリアの洞窟教会に描かれた中世壁画群の 現状から見る修復と保存

関谷 倫寿

人間社会学域 人文学類 4年

## 1. はじめに

南イタリアはキリスト教文化研究の視点から見ても、東方からのギリシア正教とベネディクト修道会によるローマ・カトリックが混交し、イタロ・ビザンティン様式の美術を展開したところで、洞窟教会の建築や壁画には美術史的にも多くの興味深いテーマを見出すことが出来る。とくに、アドリア海側のプーリア州では、東ローマ(ビザンティン)帝国でイコノクラスム(聖画像を偶像とみなした破壊活動)の嵐が吹き荒れた8-9世紀以降、多くの修道士たちが渡来し、カッパドキアにも似た凝灰岩質の渓谷や大地を彫りぬいて、多くの洞窟教会や修道院を建設した。しかし、現在、それら中世の洞窟教会や修道院は歴史から忘れ去られ、荒廃し、無残な姿で残っている。洞窟教会などに描かれた中世壁画群は1960年代に一定の学術調査が実施されたとはいえ、歴史的文化財としての保存や復元の対象として注目されることのないまま消滅の危機を迎えていた。

今回の調査では、金沢大学フレスコ壁画研究センターが実施する南イタリア中世壁画群の調査プロジェクトに同行するが、その調査では、そのように危機的状況にある、プーリア州に散在する洞窟教会内に描かれた中世壁画の保存状態を日本製の最新の科学計測機器を使用して分析診断し、現状をデジタル・アーカイブに記録していく事を主な目的としている。

筆者は、プロジェクトにおいて宮下孝晴教授をはじめとした4人の教授の調査の補助が主な役割であったが、後世に実施された修復(マッセッロ法)が壁画の保存にどのような影響を与えているのかという点に注目して、壁画保存の問題点を、各種データを収集することで分析・検討することを目的とした。

## 2. 調査日程・訪問先

2011年9月6日から9月17日までの12日間、南イタリアのプーリア州バーリ県にあるグラヴィーナ・イン・プーリアに滞在し、プロジェクトの補助スタッフとして参加するとともに、洞窟教会と博物館での調査、資料収集を行った。主な調査地は4ヶ所であった。1ヶ所目は凝灰岩台地にある洞窟教会、パードウレ・エテルノ教会(Chiesa del Padre Eterno)。2ヶ所目がグラヴィーナ・イン・プーリアの旧市街地の南にあるサン・ヴィート・ヴェッキオ教会(Chiesa di S.Vito Vecchio)、その教会内部の壁画がマッセッロ法によって剥がされ、移築されたのが3ヶ所目のエトローレ・ポマリチ・サントマージ財団博物館。そして4ヶ所目が深い峡谷の断崖にできた自然洞窟の中にあるサン・ミケーレ・デッレ・グロッテ教会(Chiesa di S.Michele delle Grotte)である。

## 3. 調査内容と結果

今回調査したパードウレ・エテルノ教会とサン・ヴィート・ヴェッキオ教会では、マッセッロ法によって壁画が移築されている。マッセッロ法は、フレスコ画の描かれた壁を、石やレンガを積み上げた壁体ごと適当な大きさのブロックに切り取り、鉄柵で締め、ひとつずつ移動させる方法である。建造物の崩壊や改築にともなう物理的な破壊からフレスコ画を守るために実施されたと考えられる。ヴァザーリによれば、この方法は16世紀にはすでに行われていた。しかし、このマッセッロ法についての詳しい資料は残っていない。

今回の調査では、このマッセッロ法によって移築された、もとの洞窟教会と移築された博物館の壁画を比較することにより、その方法と保存の問題点を明らかにしたい。特に、パードウレ・エテルノ教会において比較し、見ていくことにする。

パードウレ・エテルノ教会はグラヴィーナ峡谷を挟んで旧市街地の反対側（西側）に広がる凝灰岩台地にある。内部は後陣を備えた二廊式的设计で、後陣の中心部分にはもともとは壁画が描かれていたのではないかと考えられるが、楕円形に破壊されており、現在では漆喰で埋められている。湿度が高いせいか、緑色の苔のようなものが壁面の下半分ほどを覆っている。この教会の壁画は後陣部分の壁画を残してほとんどの壁画が失われてしまっている。これは劣化等による欠損ではなく、マッセッロ法によって、保存の目的で剥がされている。剥がされてしまっている箇所は、後陣正面の左右の壁画、左右の側壁、後陣の中央上部、左側に拡張された側廊正面の6ヶ所である。これらの剥がした壁画はどこに保存されているのかわからず、行方不明になってしまっていた。しかし、今回の調査において、その行方を特定することができたのである。現在、左右の後陣正面、また側壁の壁画は、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画の移築先と同様のエットーレ・ポマリチ・サントマージ財団博物館の小部屋に移築されている。その他、側廊正面と後陣中央上部の小さな壁画はサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画が移築された場所に無造作に置かれていたのである。これらの壁画がパードウレ・エテルノ教会から移築されたものであると判断した理由は、まず、剥がした時に失われてしまった部分を考慮しても、大きさが一致すること。また、後陣に残る壁画のフリーズ部分の装飾模様と同じような装飾がみられるためである。

パードウレ・エテルノ教会とその教会内部の壁画が、エットーレ・ポマリチ・サントマージ財団博物館にある壁画ということを利用してそれぞれ測量を行い、比較すると、博物館内の小部屋に移築されていた壁画と、パードウレ・エテルノ教会の剥がされた跡とは一致することが分かる。どの壁面も壁画が描かれていた面積と、剥がす際に削られてしまった分を考慮しても綺麗にはまるのが分かる。【図1～16】壁画を剥がす際には、壁画自体を傷つけないために周囲を余計に削るものである。そのため、剥がした跡の方が切り出した壁画よりも大きくなる。

右側壁に描かれていた聖人が1人であったのに対し、剥がした跡が大きくなってしまっている【図6・7】が、これは壁画の裏面をえぐって切り離すために、まず壁画の横に、壁面に対して垂直に彫っていく必要があったためである。事実、右側壁に向かって右側には壁面に対して垂直に削った跡が見られる。これは後陣

正面の左側の壁画においても同じことが言える【図1・2】。左側壁では、最初から壁画の側面が見えている状態であり、すぐに壁画の裏側を掘り進むことが出来たのである【図4・5】。

次に、後陣部分から剥がされた聖書【図10】と、拡張された左側廊から剥がされた十字架【図15】についてである。これらの剥がされた破片は、博物館でサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画が移築されたのと同じ部屋の左右の壁に向かいあいようにして、無造作に立てかけられて置かれていた。どちらも一辺が30数cmの破片であったので、段ボールで実寸大のパネルを作成し、実際にはめ込んでみることにした。まず、聖書の破片を後陣の剥がされた跡にはめ込んでみると、博物館に置かれていた状態と同様の状態で完全に一致したのである【図9】。一方、左側廊の十字架を再現したパネルであるが、博物館と同じ置き方ではめ込んでみると、確かなにはまりはするが、剥がされた跡とパネルの形が一致せず、違和感を覚えた【図13】。そこで90°左に回転させた状態で再びはめ込んでみると、今度は完全に一致したのである【図14】。つまり、博物館に置かれている十字架の破片は、正確な置き方ではなく、本来は90°左に回転させた状態で置いておかなければならないのである。ここから移築前の全体像を予測すると【図11・16】のようになる。

#### 4. 成果と展望

今回の調査では、博物館内の小部屋の壁画が、もとはパードウレ・エテルノ教会に描かれていた壁画ということが分かり、またそれらの裏付けの調査の中で、あまり記録が残っていないマッセッロ法の方法について考察することが出来た。壁画へのダメージを最小限にするために、どこから、どういう順番で切断し、移築していくのか、また、どのくらいの幅で切断していくのか、ということが推測できる。さらに、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の調査も含めば、マッセッロ法の実態について多くのことを予測できる。今後、他のマッセッロ法で移築された壁画を調査していくことで、より正確で、詳細な実態をつかむことが出来るだろう。

マッセッロ法によって移築された壁画は、野ざらしの壁画よりも湿度や温度が調整され、良い状態で保存される。しかし、移築された博物館内の小部屋の壁画がいくらきれいに残っていても、どこにあったものな

のか、記録が残っていなかったのは問題である。記録がなければ、マッセッロ法によって移築され、時間がたち、その壁画がもとはどの教会にあったものなのか、わからなくなるのは当然のことである。もしかしたら、移築前の教会が失われてしまう可能性もある。移築前後の記録をしっかりと残すことは、その歴史的な意義も残すために非常に重要なことである。今回の発見により、無造作におかれていた十字架と聖書の断片をきちんと展示すること、また、パードウレ・エテルノ教会の管理を厳重にすることが求められるし、それを提示すべきだ、と考えている。

洞窟教会に描かれた壁画と博物館に保存されている壁画では、もちろん、博物館の方が非常に良い状態で残っている。保存するための環境が整っていなければ貴重な歴史的な文化財である壁画は失われてしまう。今回の調査では、状態の良い壁画がたくさんあり、移築して保存するのは難しくとも、高精細写真で記録に残す、ということが求められると強く感じた。このままでは時間がたつにつれ、よりたくさんの貴重な壁画を見ることはできなくなる。その前に、現存する壁画への調査、記録が早急に行われるべきである。

## 5. 謝辞

今回、研究を行うにあたり、宮下孝晴先生をはじめ、五十嵐心一先生、江藤望先生、大村雅章先生、真田茂先生、また、金沢大学フレスコ壁画研究センターの皆様には、現地での数多くのご指導だけでなく、生活の上でも大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

### 参考文献

- 宮下孝晴／宮下睦代他著『2010年度金沢大学フレスコ壁画研究センター 研究調査レポート Vol.1』金沢大学フレスコ壁画研究センター 2011
- 宮下孝晴／宮下睦代監修『2010年度 フレスコ画を剥がす フレスコ壁画保存のためのディスタッコ法実習報告書』金沢大学フレスコ壁画研究センター 2011
- アレッシンドロ・コンティ著、岡田温一他訳『修復の鑑 交差する美学と歴史と思想』ありな書房 2002
- 高階秀爾監修『増補新装 【カラー版】西洋美術史』美術出版社 2002

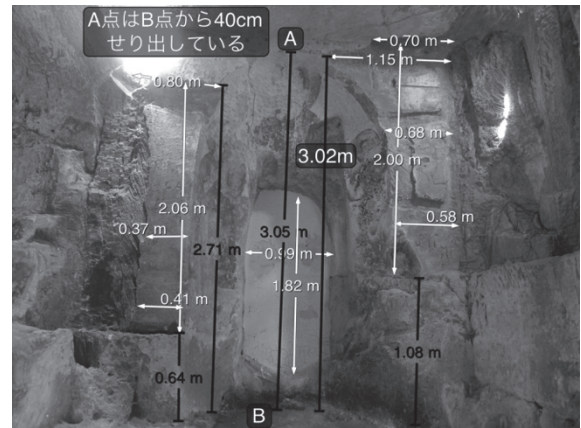


図1 後陣測量図

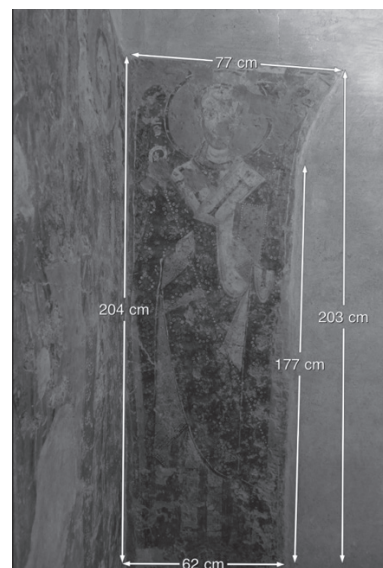


図2 後陣正面の左側の壁画

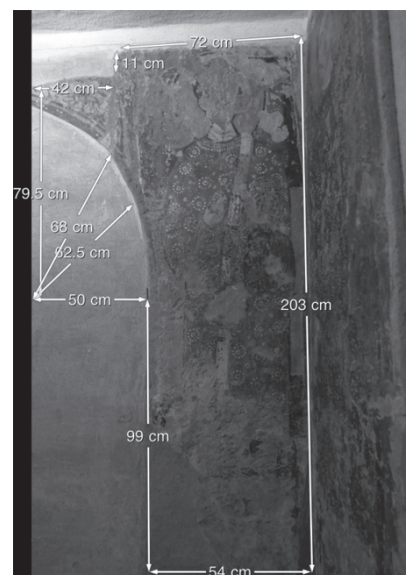


図3 後陣正面の右側の壁画

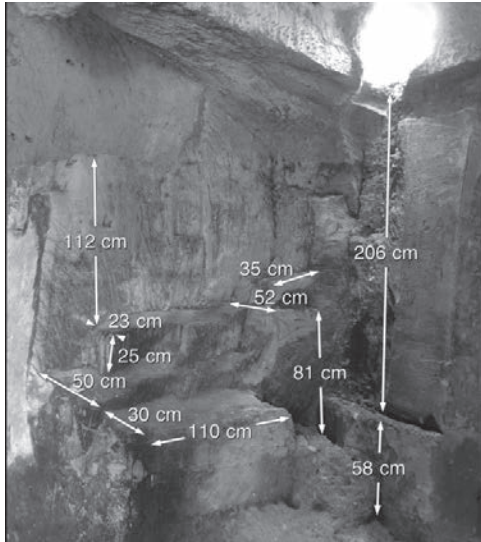


図4 左側壁の測量図

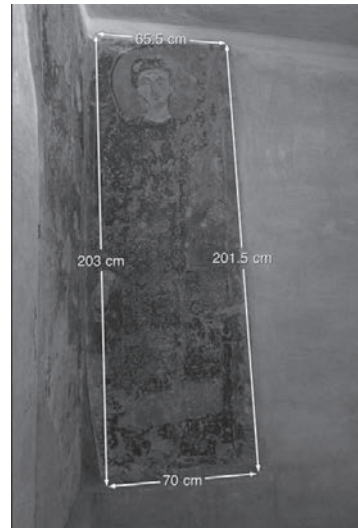


図7 右側壁の壁画

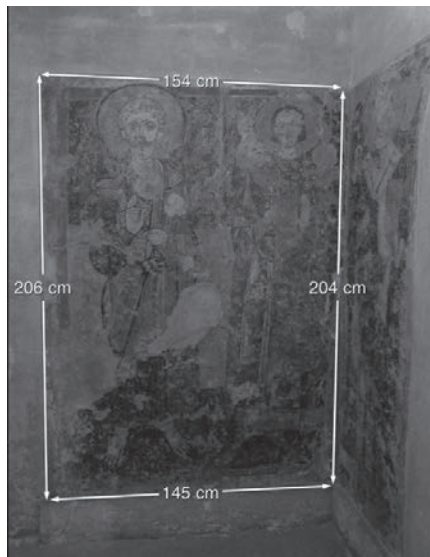


図5 左側壁の壁画

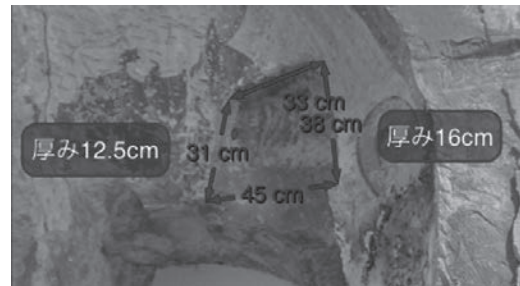


図8 後陣上部、聖書の剥がされた跡

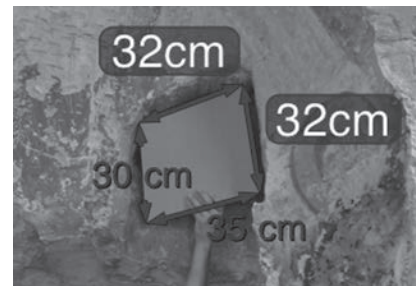


図9 聖書跡に段ボールを合わせる

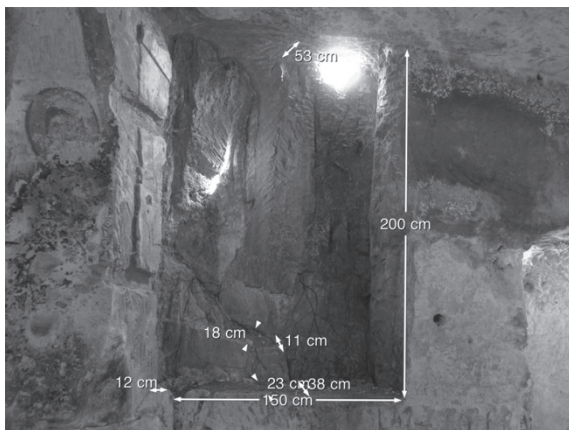


図6 右側壁の測量図

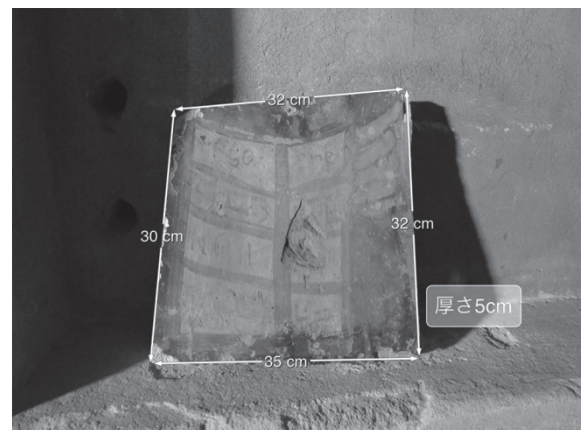


図10 聖書



図 11 予想される全体図

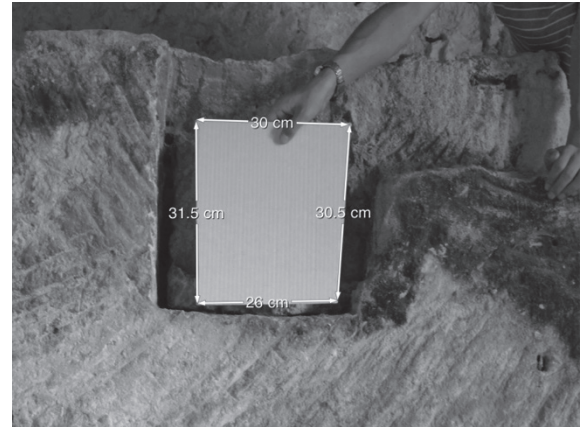


図 14 博物館の置き方から 90° 左に回転させた場合

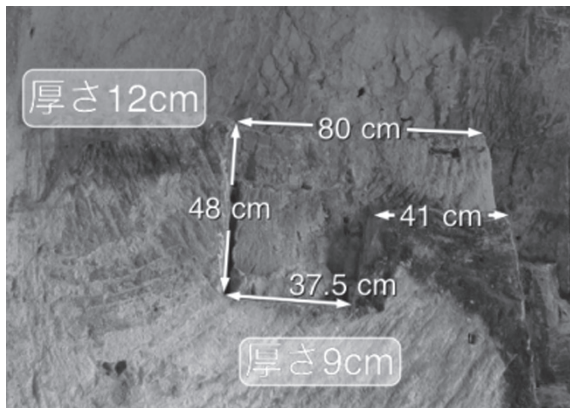


図 12 左側廊、十字架の剥がされた跡

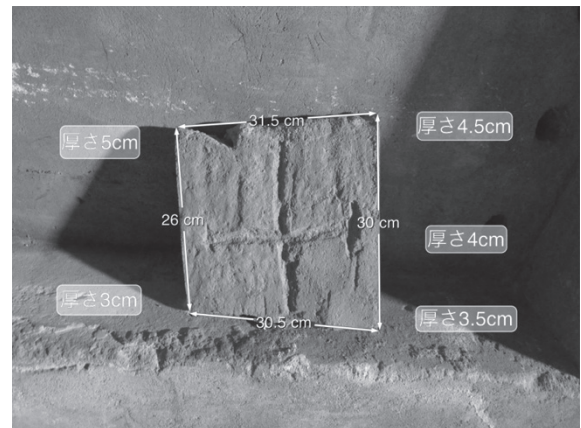


図 15 十字架

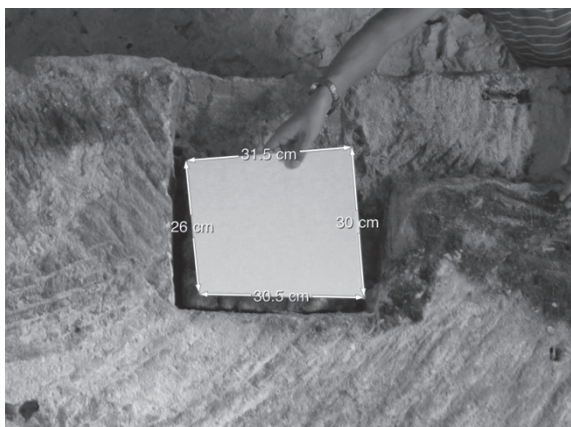


図 13 博物館と同じ置き方ではめ込んだ場合



図 16 予想されるもとの十字架の図